

## 生きるままに生きる生を開く

### ——性的虐待からの回復分析の準備としてのレヴィナス——

井上 瞳

#### 1-1. 性的虐待はただの空想か？

二一世紀に入り、ようやく世界的に性的虐待被害がもたらす様々な苦しみが大々的に問題とされ始めた。アメリカの精神医学界を中心に起こったこの動きの柱となるのは(1)「複雑性心的外傷後ストレス障害」という新たな診断名の提案(2)回復プロセスの提示という二つである。

アメリカの精神科医ジュディス・ハーマン (Judith Lewis Herman, 1942-) を筆頭に始まったこの取り組みは、性虐待被害者の体験が「現実であることを確証した」<sup>1</sup>という点で非常に革新的なものであった。というのも、被害者の体験は一度認められたにも関わらず、約一世紀の間「ファンタジー」として打ち捨てられていた経緯があるからである。

精神医学界におけるこうした一連の移り変わりの最初の出発点に、ハーマンはオーストリアの精神医学者ジグムント・フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) を位置づける。

患者たちはくり返しくり返し、性的襲撃、性的虐待、近親による強姦を語った。記憶の糸をたぐって、フロイトと彼の患者とは、幼年時代の心的外傷の重大事件が、ヒステリー症状の引き金を引いた、より近い、しばしばそれと比べては些細な体験の背後に今も身をひそめているのをあばき出し。<sup>原文ママ</sup>一八九六年前後には、フロイトは、ヒステリーの源泉を発見したと考えていた。<sup>2</sup>

「ヒステリー」とは、一九世紀後半に精神医学界で改めて体系化が試みら

れた現象である。当時「ヒステリー」という言葉自体は広く流布していたが、その理解の内実は「女性特有」の「了解不能な […] 奇病」<sup>3</sup>という偏ったものであった。

フロイトの功績は、「性的襲撃、性的虐待、近親による強姦」といった「幼年時代の心的外傷の重大事件」という原因を取り出したことにある。言い換えれば、フロイトによってヒステリーは決して説明のできない「了解不能な奇病」ではなく、かといって「女性特有」という説明に尽きるものでもないもの、つまり児童期にもたらされた性的な事件という外傷との連関で生じるものとして定義され直されたのである。

性的虐待とその苦しみとは、女性の単なる空想・奇病といった従来の理解ではない外傷的事件とヒステリー症状という名を獲得し、一度は認められた。しかしフロイトはその後一年以内に、自身の説を打ち捨てる。

はやくも一年以内にフロイトはヒステリーの原因の心的外傷説をひそかに斥けていた。 […] ヒステリーは女性にありふれた病気であるので、かりに患者の語るところが真実であり、彼の説が正しければ、彼自身のことばを使えば「幼小児に対する倒錯行為」というものが蔓延しているという結論にどうしてもなってしまう。 […] パリの無産者層だけならともかく、目下繁栄中のウィーンのご立派なブルジョワ家庭においても蔓延していることになってしまう。<sup>4</sup>

ヒステリーのルーツには児童期の性的搾取があるというフロイトの発見は社会が真実として受け容れられる限界を超え、フロイトは同業者から完全に陶片追放を受けた。<sup>5</sup>

ヒステリーの原因に児童期の性的虐待があるというフロイトの説は、裏返せば、当時ヒステリーが「ありふれた病気」であったのと同様に、性的虐待を社会的な階級を問わず「ありふれた」ものと認めることを意味していた。フロイトのこの新たな見方は「社会が真実として受け容れられる限界を超えていたのである。

そして自身の説を打ち捨てた後年、フロイトは性的虐待の極端な否認者へと姿を変える。ハーマンはその様を「フロイトは、女性たちは嘆き訴えるけれども、実は性的虐待に会うのをあこがれており、それを幻想しているのだと主張しつづけた」<sup>6</sup>と語る。

こうして一九世紀後半、フロイトによって一旦は名を獲得した性的虐待とその苦しみとは、その後約一世紀の間、忘れられることとなった。

### 1-2. 再発見された性的虐待

約一世紀の健忘症を経て、今一度性的虐待は思い出される。第一次・第二次世界大戦・ベトナム戦争による男性の戦闘参加帰還兵たちの傷が「心的外傷後ストレス障害」<sup>7</sup>という診断名を得た後、彼らの体験する苦しみと「本質的に同一である」<sup>8</sup>というかたちで、性的虐待による苦しみは再度発見され直されたのである。

こうして性的虐待被害とそれによってもたらされる様々な苦しみとは、常に「名付け」という問題を孕み続けてきた。名が与えられることは、同時に性的虐待被害者の苦しみを現実の中に位置け、対処可能にすることを意味し、反対に名が与えないことは彼らの苦しみを空想として現実の外へ追いやることを意味していたからである。

これら一連のプロセスを経て、ようやく安定して「心的外傷後ストレス障害 (PTSD)」という名を獲得するに至った性的虐待という問題は、現在新たな問題に直面している。それは、名付けという行為そのものが常に取りこぼしを孕むという問題である。

### 1-3. 名付けと支援

ハーマンを中心とした新たな診断名の提案という近年の運動においても、被害者の苦しみが完全に汲みつくされたと断言することは難しい。

ハーマンの一つ目の取り組み——新しい診断名の提案——においては、従来の心的外傷後ストレス障害という診断名では扱うことのできない範囲をカ

バーすることが念頭に置かれている。そもそも「局限性外傷の事件の被害者から取られた」概念である PTSD がモデルとしているのは「典型的な戦闘、自然災害、レイプ」といった一回限りの外傷の体験である。それゆえに「長期反復性外傷」である性的虐待被害がもたらす症状群は十分に拾うことが難しいのである<sup>9</sup>。

また、二つ目の取り組み——回復プロセスの提示——においても、ハーマンは固定化することで取り逃されるものに対して注意を払う。というのも、彼女が示す回復プロセスにおいて重要視されるのは、「螺旋的」「波動的」と形容されるプロセスの動きだからである。ハーマンは三段階によって回復プロセスを整理すると共に、この三段階が直線的に進むものではない点を強調する。実際、ハーマンは自身の三段階という考え方を「フィクション」であるとし、「本来複雑な渦を巻いている過程を無理やり単純化し整理しようというものである」<sup>10</sup>と語る。

そこで、本稿が目指すのは、ハーマンが二つの取り組みを通して捉えようとする名付けの外側にアプローチする新たな方法論の提示である。ここで重要となってくるのは、支援者が外から名付けた回復像ではなく、被害者自身の内から生きられた回復である。ハーマンが、支援者を「あなたがあなたの人生の舵手であることをたえず思い出させるように」する存在だと語る時、またハーマンと同時代の精神科医であるフランク・パトナム (Frank W. Putnam, 1947-) が「自然回復力」<sup>11</sup>を語る時に彼らが捉えようとしている動きそのものへアプローチしたい。

#### 1-4. 誰もが支援者になりうる

性的虐待はその性質上、他者へ明かされることが極めて少ない。この傾向は日本でも顕著に現れており、二〇一五年の児童相談所の児童虐待相談件数は対前年度比116.1%の増加率で、ついに10万件を超えた。ところが唯一、性的虐待の相談件数はこの流れに倅差し、その割合を見ると心理的虐待(47.2%)、身体的虐待(27.7%)、ネグレクト(23.7%)であるのに対し、性的虐待(1.5%)となっている<sup>12</sup>。

こうして数字からも、性的虐待被害を他者に語ること、公的機関で語ることは、決して誰もが行き着く選択肢ではないことが示唆される。こうした状況の中で重要となってくるのは、精神科医や臨床心理士といった専門的な支援者はもちろんのこと、そうした専門家ではない普通の人々も含めた私たち、性的虐待被害者が実際に生きている生をできる限り生きたままに理解する方法ではないだろうか。

そこで第二節では、広く他者との関わりを論じたフランスの哲学者エマニュエル・レヴィナス (Emmanuel Lévinas, 1906-1995) の中期の代表作『全体性と無限』(一九六一)を手掛かりにしたい。というのも、レヴィナスはこの中で、人間の主体生成という極めて動的な場を生として捉え、このダイナミズムを保存したままに捉える方法論について語っているからである。

## 2. ダイナミズムを捉える技法としてのレヴィナス

『全体性と無限』では「分離」<sup>13</sup> という語を用いて、ダイナミズムを維持したかたちで生と向かい合う場面が描かれる。

そうした存在の具体的な分析、分離を達成するある一つの存在によって企てられる具体的な分析 (しかもそうした存在は分離を分析しながら分離を達成することを止めない) は、分離を内部的な生として […] 認めることになるだろう。(TI, 112) [p. 210]

レヴィナスはここで「分離」と呼ばれる概念の特徴を述べる。括弧内でレヴィナスが分析対象であるはずの「分離」を分析者自身が達成する構図を示していることから、彼にとってこの概念が通常の主客関係とは一線を画していることが読み取れる。したがって、このようなレヴィナスの記述に依拠すれば「分離」という概念が特殊であるのは、通常何かから離れる運動として外部が想定されるのに反して、分析者が自分自身を分析する、いわば内部観測の方法として示されているからだといえるだろう。

またこのように自分自身を分析することを彼が「分離を内部的な生として

「…」認めることになるだろう」と述べていることから、彼にとっての分析対象は外にある生ではなく分析者の生そのものであることが読み取られる。

自分自身の生と向かい合うとき私たち人間はよそよそしい態度を取ることがない。なぜならそこで向かい合っているのは、まさにそこを私たちが生きている具体的な生だからである。

## 2-1. 包み込むという関わり

前節ではレヴィナスの記述から、内部観測の方法としての「分離」概念を読み解いたが、レヴィナスが「分離を分析しながら分離を達成する」と述べている以上、私たちはここで観察しながらこれを観察対象として固定しない解釈可能性を探し論証していくことにしよう。まずは「生」という語に視線を向けたいと思う。この語は『全体性と無限』第二部の鍵語となっているのだが、レヴィナスはその中の「生としての分離」と題された箇所、対象を固定する関わりと対象を固定しない関わりとの違いを際立たせるために生について語っている。二つの引用を見てみよう。

私たちは「おいしいスープ」、大気、光、風景、労働、観念、睡眠等々を生きる。〔…〕私たちはそれらを生きる。〔…〕私たちがそれを生きるものは〔…〕楽しむことの対象である。(TI, 112) [p. 211]

楽しむとは私の生を充たす一切の内容についての究極的な意識であり、楽しむことはそれらの一切の内容を包み込む。(TI, 114) [p. 214]

ここから私たちは、いったいどのようにして対象を固定することなく関わるのが可能となるかを読み取ることができる。レヴィナスが言うように「おいしいスープ」、大気、光、風景、労働、観念、睡眠」という日常生活を送りながら、これらを対象として固定し分断するのではなく「包み込む」ことで、私たちは一切の日常生活の中に身を置きながら、同時に「楽しむ」<sup>14</sup>という一段上の水準に身を置くことが可能となる。

また別の箇所ではレヴィナスが「私たちは楽しむことにおいて常に第二階 (deuxième degré) に自らを維持するが、しかしこれは未だ反省 (réflexion) ではない」(TI,116) [p.217] と述べていることから、彼にとっての楽しむという内部観測が対象と異なる水準を要するものでありながら、自分自身に影響が及ばない地点から対象を固定化する反省の態度ではないことが読み取られる。つまりレヴィナスにとっての生とは、ただ日常生活を送ることでなく、かといって抽象化することで流れを分断してしまうことでもなく、楽しむという水準から、日常生活の一切をそのまま包み込むかたちで意識することなのである。

以上のようにレヴィナス思想における生を理解する場合、ではいったいどのようにして自分自身の生の中に身を置くと同時に第二階の水準に身を置き、生の流れを分断することなく意識することが可能となるのかという問いが立つ。この問いに対してレヴィナスは、私たちの固定観念を揺さぶるかたちで応答する。言い換えれば、内部観測とはあらかじめ確立している主体が着手するものではなく、その流動的な営みにおいて初めて主体が生成する場そのものを意味している。

## 2-2. 主体生成のダイナミズム

内部観測が主体生成の場であることについて、レヴィナスの記述を参照しておこう。内部観測が対象の流れを保存することができるのは、観測者自身がこの観察において動的に生成しているからである。レヴィナスはこの生成の様子を、状態と運動とを対比することで際立たせる。

楽しむこととは自己の内への退却であり、言うならば内転 (involution) である。情動的な状態と呼ばれるものは、一つの状態という鈍い単調さではない。それは自己がそこで立ち上がるような、揺れ動くある一つの高揚なのである。(TI, 123) [p.230]

ここから私たちは、「鈍い」「単調さ」という語によって表現される状態と「揺

れ動く」という語によって表現される運動との差異を読み取ることができる。レヴィナスはここで人間の楽しむという在り方を「内転」と「高揚」の二運動によって説明することで、先ほどの自分自身の生に身を置くと同時にこれと異なる第二階の水準に自らを位置づけるという議論を整理している。言い換えれば、日常生活における私たちの生は「自己の内への退却 (retrait)」というかたちで内転を流れとするのだが、この内転の只中でこの内転を観察する視点が「高揚」というかたちで立ち上がるのである。

また、こうした主体の生成をレヴィナスが「情動的 (affectif)」と特徴づけていることから、反省によって抽象的かつ概念的に描き出され主体概念ではなく、生身の主体が念頭に置かれていることを読みとることができる。次にレヴィナスにとってのこの特徴的な主体生成が「螺旋」のイメージで表現されている箇所を参照しよう。

〈私〉は実際、楽しむことの基体ではない。[…] 〈私〉とは感情の凝縮 (constriction même du sentiment) に他ならない。楽しむことが巻き付き内転してゆく螺旋の極に他ならない。曲線の焦点が曲線の一部になっているのだ。楽しむことが作動するのは、まさに巻き付きとしてであり、自己へ向かう運動としてである。(TI, 123) [p. 230]

ここから私たちは、先ほど運動のかたちで表されていた主体生成をイメージのかたちで理解することができる。レヴィナスの「曲線の焦点が曲線の一部になる」という一文にこのイメージは凝縮されている。言い換えれば、主体生成は自己へ向かう内転の運動として「曲線の焦点」を担っているのだが、焦点は曲線と切り離されたかたちで曲線に対し支配的に振る舞うのではなく、それ自身一部となり曲線を構成するのである。

このような曲線のイメージは、レヴィナスにおける先ほどの生の議論と重なり合う。というのも、内部観測における観察者があらかじめ確立していないにも関わらず異なる水準にあり、かつ自分自身の外部にある対象ではなく自分自身の生を観察するという生の構図は、言い換えれば曲線の焦点として曲線そのものから区別されながら、かつ焦点が曲線の一部を構成することと



してイメージすることができるからである。

そして、この曲線の構図こそが、まさに生のダイナミズムを損なうことなく捉えるという一つの姿勢を示すものである。今回レヴィナスの議論から見えてきた自らの生の流れを保存したままに向かい合うという「分離」の方法が、ではいったいいかにして性的虐待被害の回復を内から捉える方法論へ接続可能であるのかのという点については、更なる課題として次回へ譲りたい。

## 註

1. ジュディス・ハーマン『心的外傷と回復』中井久夫訳、みすず書房、2004、p.41
2. 同書、p.13
3. 同書、p.8
4. 同書、p.14
5. 同書、p.21
6. 同書、pp.22-3
7. 同書、「二十世紀の大部分の期間、外傷性障害にかんする大量の知見の発展をみちびいたものは戦闘参加帰還兵の研究であった。」p.38 参照。
8. 同書、p.44
9. 同書、pp.187-8
10. 同書、p.241
11. フランク・パトナムが『解離——若年期における病理と治療』（中井久夫訳、みすず書房、2001）の中で提唱する概念。
12. 平成 27 年度児童相談所での児童虐待相談対応件数速報値（厚生労働省）  
<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000132366.pdf>（2017 年 11 月 30 日閲覧）
13. 「分離」の議論には二通りの先行研究がある。小手川は「分離」を「世界からの分離」「他者からの分離」「自我からの分離」の三つに分けて解釈するが、本論は何からの分離かという点は強調せず、「分離」単体で主体化の方法論と捉える。これに関しては小手川正二郎『甦るレヴィナス』、水声社、2015、pp.127-138 参照。  
また、高井は「分離」を「私が私として確立していること」と解釈しており、本論はこの議論を部分的に反復するものである。これについては高井寛「私が私であること：ハイデガーとレヴィナス」、『Heidegger-Forum』第 10 号、2016、p.84 参照。
14. 通常 *jouissance* は「享受」と訳されるが、本論ではこれを主体による内部観測の文脈で解釈するため、より主体的な側面を強調するため「楽しむこと」という訳語をとる。  
また、村上も *jouissance* を分離のモデルとして議論する。村上によると「まず享楽 (*jouissance*) が分離のモデルとなり、享楽のなかに様々な具体的な分離のモードが派生する。倫理はそのなかの一つに過ぎない。」のであり、従来の「倫理」概念ではなく、「楽しむこと」(*jouissance*) 概念を強調する。これについては村上靖彦「死ぬのに楽しい」：訪問看護における看取りをめぐる現象学的な質的研究

『Heidegger-Forum』第10号, 2016, p.114 参照.

レヴィナスのテキストの略号

本論中の引用には以下の略号を用いる.

Emmanuel Lévinas TI: *Totalité et infini —essais sur l'extériorité*, Le Livre de Poche, 2012 (1re édition, 1971)

訳出にあたっては下記の既訳を参照したが、文脈に応じて独自に訳出している.

『全体性と無限（上）』熊野純彦訳, 岩波文庫, 2005

『全体性と無限（下）』熊野純彦訳, 岩波書店, 2006

『全体性と無限』合田正人訳, 国文社, 1989